

保護者が育つ園の支援

古来より「親が育てば子は育つ」とか、「親の背中を見て子は育つ」などと、保護者の存在の大きさが言われてきました。教育基本法では、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するもので（後略）」とあります。今、園では「親も子も育つ」運営をめざしています。

保護者育ては園の役割の一つです。保護者の子育てが無意識的なものから、意識的、意図的なものに少しでも向かうことが望めます。このことに向けた園の支援が望めます。

この章では、園からの情報発信と、保護者が保護者として自覚をもち、自ら育つ園運営のポイントを紹介します。

保護者の成長を促す園の支援

P.17

思いを伝える情報発信で
保護者と「つながる」園をつくる

P.20

Q&A 保護者との関係づくり
こんなときはどうする？

P.24

保護者の成長を促す園の支援とは

インタビュー

今求められている保護者支援のあり方

地域や家庭における人間関係のつながりが弱くなり、子育てに悩む保護者が増える傾向にあります。それと同時に、園に対する保護者の期待も高くなっているようです。子どもとともに保護者自身も「保護者として」成長していくために、園ではどのような支援ができるのでしょうか。発達心理学を専門とする子安増生先生にお話をうかがいました。



京都大学大学院教育学研究科教授

子安 増生

こやす・ますお

京都大学大学院教育学研究科教授。専門は発達心理学。2008年より日本発達心理学会理事長、2011年より日本心理学会連合理事長を務める。著書に、「幼児期の他者理解の発達」（京都大学学術出版会）、「心の理論」（岩波書店）、共著に「幼児が「心」に出会うとき-発達心理学から見た縦割り保育」（有斐閣）など。

自分の子ども時代を振り返り
子育てに客観性を
保つことが大切

もしかすると、現代は子育てが難しい時代かもしれない——私はそう考えることがあります。核家族化が進んで体験にもとづいた子育ての知識や経験が受け継ぎにくくなって

いる一方、テレビやインターネットにはさまざまな情報があふれている。保護者が子育てに迷いをもつのは当然と言えるかもしれません。その結果、幼稚園や保育所に多種多様なテーマについてアドバイスを求めるだけでなく、保育者に過剰な期待や要求を寄せるようになる保護者が増えているのだと考えられます。

保護者の抱く不安や心配を取り除くには、まず、子どもの発達についての確に理解してもらうことが大切です。そこで発達心理学の見地から、保護者に対してどのようなサポートや助言ができるかをお話ししましょう。

私が保護者に対して強調して伝えるのが、常に客観的な視点をもって



み出した概念で、親子の情緒的・心理的なつながりを指します。ボウルビイは第二次世界大戦で孤児になった子どもの心身の発達が遅れた要因は、医学的なケアよりも、ヒューマンケアにあると指摘して、愛着関係の大切さを訴えました。

愛着と子どもの発達の間を、このようなテストがあります。母親と子ども、そして見ず知らずの他人の3人がしばらく同じ部屋で過ごした後、母親だけ、または母親と他人と一緒に室外に出ます。すると、どちらの場合も、愛着関係が十分な親子の場合、子どもはあまり動揺しませんが、不十分な場合は母親から離れると、心理的に非常に不安定になります。この結果は、しっかりとされた親子関係があれば、子どもの自立がスムーズになることを示唆しています。

乳児期は親子がずっと一緒に過ごすのも良いのですが、やがて発達に伴って離れる場面が生じてきます。タイミングとしては、幼稚園や保育所に入る、子ども部屋をつくる、あるいは小学校に入学するときなどが考えられるでしょう。

こうした節目では、心理的な愛着を保ちながらも、かたちの上では明確に接し方を変えなくてはなりません。それが「ぴったり離れる」ということです。そのような体験の積み重ねにより、子どもの自立心が育っていくのです。

これは、親にとっては「子離れ」のきっかけとなるでしょう。いつま

でも親が子どもの身のまわりの世話をしていたら、子どもが何でもできるようにならないのは当然です。にもかかわらず、「うちの子どもは何もできない」と嘆く親をよく見かけます。こうした悪循環に陥らないためには、保護者が子どもの力のある程度信じ、子どもに任せる範囲を徐々に増やしていく必要があるでしょう。

繰り返しになりますが、子どもと「離れる」ときでも、常に心理的なつながりは実感させることが重要です。手のひらを返すように冷たい態度を取れば、愛着関係が崩れてしまいかねません。つまり、「ぴったりくっつく」と「ぴったり離れる」はセットになっているのです。

発達に応じて使い分けたい「号令・命令・訓令」

子どもの発達に伴い、語りかけ方も変えてください。その際、「号令・命令・訓令」の3つの考え方を意識すると、発達段階に応じた伝え方ができるでしょう。これは保護者だけでなく、保育者にもぜひ知っていただきたいことです。

号令は「○○をしなさい」と行動だけを伝え、命令は「○○だから、○○をしなさい」と理由も示します。一方、訓令は「○○をしなさい。方法は任せる」と、自由度をもたせた言い方です。

乳児に対して命令をしても理解してもらえませんが、号令のほうが

適切です。逆に5歳児に号令ばかりをしていたら、自分で考えて行動する力が育ちませんので、理由を伝える必要があるでしょう。また訓令はかなり高度ですので、一般的には小学生になってからと考えてよいでしょう。

もうひとつ、語りかけ方についてお話ししましょう。生活や保育の中で「駆け・引き」の言葉を意識することの大切さです。

「駆け」は、「もっとがんばって」「もう終わっちゃうの?」「まだできるでしょう」などと、子どもを励まして奮い立たせる言葉。一方、「引き」は、「よくがんばったね」「今日はこれくらいにしよう」「また明日やろうか」など、子どもを認めて活動を終わらせる言葉です。明らかに疲れている子どもに対して、駆けの言葉をかけるのは酷なだけでなく、信頼関係を損ないかねません。きちんと引きの言葉をかければ、子どもは「自分を受け入れてくれた」と満足し、次もがんばろうという気持ちになるでしょう。場面に応じて、どちらが適切かを判断してください。

信頼関係を構築するカギは保護者との約束を守ること

最後に、保護者との関係づくりについて考えてみましょう。保護者の中には、幼稚園や保育所に頼りすぎて、「どんなことでも対応してくれるはず」と考えるかたもいるかもしれません。しかし、現実には保育者

のできることに限りがありますから、ときには断然なくてはならないこともあるでしょう。そのようなときに、保護者との関係をギクシャクさせないためには、日ごろの信頼関係が前提となります。

すべての人間関係の基本ですが、保護者から信頼されるには約束を守らなければなりません。保護者との約束とは、個々に口頭で交わしたものでだけでなく、教育方針など園全体として打ち出しているものも含まれます。

約束を守るには、「守れない約束はしない」ことも大事です。安請け合いをしたり、全てを園が背負い込もうとしたりせず、ふだんから自分たちのできることに自覚的になっていくとよいでしょう。信頼関係さえできれば、例えば、子どもの体調に関する質問に対し、「それは園ではなく、病院で聞いてください」と返答しても、おそらく冷たくあしらわれたという悪い感情は抱かれなくていいでしょう。保護者が保育者に信頼を寄せていることは、子どもにも必ず伝わり、子どもと保育者の関係にも良い影響を与えるはずですよ。

子育てには悩みが付きものですが、もちろんプラス面も多く、特に子どもを通して人生を生き直すことができるのが最大の喜びだと、私は考えています。そのような子育てのプラス面を伝えることも、保護者の不安や心配を減らすとともに、信頼関係や協力関係を築いていくためのカギとなるのではないのでしょうか。

子育てをしてほしいということですが、例え話ですが、おそろくちょうちょうは青虫を見て、かつての自分の姿とは思わないでしょう。同様に大人はかつて自分が子どもだったことを忘れがちです。子どもには子どもなりの苦しさや悲しさ、また楽しさや喜びがあり、それらに共感できないと親子の気持ちにギャップが生じます。保護者は「自分は親から何を言われてつらかったか、うれしかったか」などと、常に自身を振り返る必要があるでしょう。

客観的な視点をもてないと、保護者は子どもの成長を長い時間の中でとらえられず、ちょっとしたことに不安を抱くようになります。例えば、オムツ外れが多少遅くなくても大問題ではないことは、客観的に考えれば

分かるでしょう。しかし、わが子となると、そう考えられない親が少なくありません。そのような保護者には、今現在の出来事だけに集中せず、長い時間の中で子どもを見守ることの大切さを伝えるとよいでしょう。

愛着関係を保ちながら親子が離れていく体験が重要

次に、子どもの発達に応じて接し方を変えることの大切さをお話ししましょう。私はこれを「ぴったりくっついて、ぴったり離れること」と言い表しています。

「くっつく」は、「愛着」と言い換えられます。愛着とはイギリスの児童精神科医ジョン・ボウルビイが生

思いを伝える情報発信で 保護者と「つながる」園をつくる

園がどのような考えのもとで保育を行っているかを
よりわかりやすく保護者に伝えることは、保護者の協力を得て保育を行い、
園をよりよい場とするための有効な手段です。

インタビュー

エピソードとプロセスで、園の「見える化」を

保護者に対して積極的に情報を公開し、交流を深めているにもかかわらず、
保護者対応の難しさを実感している園も少なくありません。保護者との関わりを考えるうえで、
何がポイントになるのかを子育て支援に造詣が深い大豆生田先生にうかがいました。

難しくなってきた保護者とのコミュニケーション

子育てを取り巻く状況が 大きく変わったことが要因

近年、「保護者とのコミュニケーションが難しくなった」という保育者の声をよく耳にします。これは、
マスコミで紹介されるような意思疎通が極端に難しい保護者が増えた
ためなのではないでしょうか。私はもっと

社会的な、別の理由があると考えて
います。

そもそも、子育てを取り巻く状況
はこれまでと劇的に変わっています。核家族化で両親の育児の負担は
大きくなり、さらに共働きの家庭が一般的になったことで、結果的に保
護者の子育ての苦勞は増えています。また、少子化の進行で、保護者



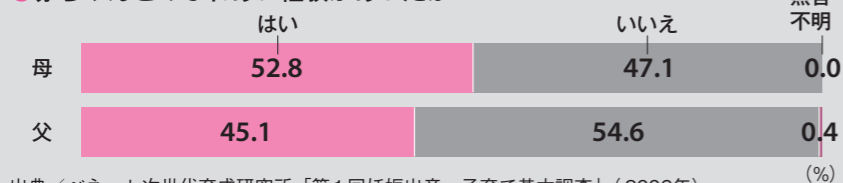
玉川大学教育学部
乳幼児発達学科准教授
大豆生田啓友

おおまめうだ・ひろとも
専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。著書に、「これでスッキリ! 子育ての悩み解決100のメッセージ」(すばる舎)、「よくわかる子育て支援・家族援助論」(ミネルヴァ書房)など。

保護者の現状 赤ちゃんとふれあう経験がないまま親に

ベネッセ次世代育成研究所が行った調査では、「子どもの頃から今まで(第一子を妊娠/出産するまで)に赤ちゃんと身近に接したり、世話をした経験があった」という保護者は、母が52.8%、父が45.1%であった。母・父ともに約半数の人が赤ちゃんとふれあいの経験がないまま親になっている。

●赤ちゃんとふれあひ経験があったか



出典/ベネッセ次世代育成研究所「第1回妊娠出産・子育て基本調査」(2006年)

の子育てのスタイルは「一児豪華主義」になり、わが子への期待は高まりがちです。その分、園に対する要望も多様で、大きなものとなっていく、それが叶わないと不満も高まります。

つまり、これまでは家庭や地域でなされていたことが十分に行われ

なくなり、さらに「保育のサービス化」という社会的な風潮によって、園に多くのことが求められるようになってきているのです。加えて、近所に子育ての悩みを打ち明けられる人がいないなど、保護者の孤立化も進んでいます。

園と保護者のコミュニケーション

ンが難しくなったのは事実だとしても、その原因を目の前の保護者にだけ求めるのは適切ではないと思うのです。むしろ、保護者が変わったというよりも、子育てを取り巻く社会全体が変化したのだと、私たちは認識すべきだと考えています。

園は、何をしているかわからない「ブラックボックス」!?

保育の「プロセス」を保護者に伝える

このような中で、園と保護者が円滑にコミュニケーションしていくためのひとつの方法としては、園からの情報発信の仕方を見直す必要があるでしょう。

幼児教育の現場で働いていたひとりとして、私も以前は、保育者が一生懸命にやっていること、そしてその意図や情熱が保護者に必ずしもきちんと伝わっているとは限らないと感じることがよくありました。園として、またひとりの保育者として、保護者に情報を発信しているはずなのに、子どもの様子や保育者の考えが伝わっていないのはなぜでしょうか。

それは園からの情報が、どんな行事・活動を行っているかといったものが中心になっていて、子どもがどんなことを経験し、保育者がそれによってどのように働きかけ、そして子どもはどのように成長しているかなど、保護者が本当に知りたいことが十分に伝えられていないからではないでしょうか。園での出来事が表面的に

しか伝えられていないため、園で行われている保育の意味が保護者には実は見えていないのです。いわば、園が「ブラックボックス」になっていることが少なくない気がします(下の「私の失敗談」参照)。

園の保育の意味がわからないままだと、例えば運動会でも、保護者

の関心は練習を通じた成長のプロセスには向かわず、「うまく走れたか」「お遊戯ができたか」という結果にしか向かいません。保護者は、運動会を単なるイベントとしてしか理解できていないのですから、それは当然のことです。

しかし実際には、運動会本番まで

大豆生田先生が振り返る私の失敗談

成長プロセスを保護者に語っていなかった

私が保育者として現場にいたときの話です。注意深く関わっていたある子どもが、園で昆虫をたくさん捕まえました。自分の方で遊びをつくることができたことがとてもうれしくて、私はお迎えにやってきた保護者に「こんなに虫を捕まえたんですよ!」と見せました。ところが保護者から返ってきた言葉は「え? それを家に持って帰らないといけないんですか?」という一言。

子どもがどんな気持ちで昆虫を捕まえたのか、保護者はなぜわからないのだと、そのとき私は怒りに震えました。でも、時間が経って振り返ってみると、実は悪いのは私だと気づいたのです。というのも、入園してから、その子自身がどんな状況で困っていて、それに対して私がどう関わってきたのか、保護者にしっかりお話ししていなかったからです。

私にとっては子どもの成長の証だったのに、保護者の目にはただの昆虫にしか映らなかったのです。それは、私の情報発信が不十分で、保育をブラックボックスにしていたからなのです。



に子どもたちは一生懸命練習し、友だちを助けたり、アイデアを出し合ったりしながら、実に豊かな時間を積み重ねてきています。このような運動会本番までのプロセスを園が保護者に伝えていなければ、保護者の関心はわが子の当日の出来不出来にしか向かいません。

保育者はどんな働きかけを行い、子どもたちがどんな成長を遂げてきたのか、そのプロセスをきちんと伝えていけば、同じ取り組みを見ても、保護者の意識は大きく違ってくはず。「今回の運動会の見どころ」などと題して、プログラムや園だよりなどで事前にお知らせするのもひとつの手段です。子どもたちがこだわって練習してきた点を写真やイラストなどを使って紹介

すれば、より保護者に伝わりやすくなるはず。

多くの園では今、さまざまな手段で情報発信を積極的に行っています。情報発信のツールの特性を生かしながら、プロセスをしっかりと伝えていきたいものです。

子どもの「エピソード」があって初めて納得できる

保護者とのコミュニケーションの際に、もうひとつ大切にしたいのが、エピソードを盛り込むことです。

例えば、自分の子どもは友達づきあいもうまくできていないのではと心配している保護者に、保育者が「3歳児はひとり遊びや並行遊びが多いものですよ」と言ったとしま

す。確かにそれは事実でしょう。でも、きっと保護者の心配はなくなりません。「そうはいつでも、ほかの子は友だちと遊んでいるではないか」と思ってしまうものなのです。たとえ正論であっても、一般論のまま述べては保育者の考えは保護者の心には届きません。

大切なのは、保育者だからわかる子どもの成長のエピソードが盛り込まれているか、そして、今後の見通しと保育者がどう関わろうとしているかを語っているかです。これらがあって初めて、保護者は自分の子どもをちゃんと見てもらっていると思うことができ、安心できるのです。

子どもの変化や成長など、日々のエピソードを交えながら、今後の見通しや自分の思いを語るの、子どもを間近で見ている保育者だからできることです。「大丈夫ですよ」「元気ですよ」で片付けてしまっただけでは、保護者はかえって不安になってしまうかもしれません。保育者は当然だと思っていることでも、具体的なエピソードがあってこそ、保護者に伝わるのです。

プロセスとエピソードを大切にされた情報発信は、保護者が子どもをこれまで以上に理解することにも役立ちます。保育者は、園の遊びの中で子どもがどれほど成長しているか、さまざまなエピソードをもっていますから、それを保護者に伝えることで園への信頼感は高まりますし、家庭とは違う子どもの見方を知るでしょう。その結果、家庭での子どもへの接し方も変わってくるはず。

保護者を対等なパートナーとして見る

保護者が安心できる 雰囲気をつくる

保護者とのコミュニケーションがうまくとれている園を見て感じるのは、「保護者を対等なパートナーとして見ている」ということです。

例えば園の行事への参加を募るときも、保護者一人ひとりの意向や個性を尊重し、保護者も行事を楽しむことができるように配慮しています。それぞれの保護者の事情や得意不得意を考慮せず、「親なんだからこれくらいやって当たり前」と、園の一方的な思い込みでつくられた行事は保護者には苦痛ですし、今後の参加には結びつきません。

子どもと同様、保護者の主体性や個性を尊重し、保護者一人ひとりも輝かせながら園と一緒につくっていくという気持ちをもつことが大切なのではないでしょうか。

また、子どもに対してそうであるように、保護者一人ひとりに対して肯定的なまなざしを向けることも必要でしょう。「毎日の仕事がいへんな中で、慣れない子育てをよくがんばっていますね」と寄り添うことも大切です。

園が「コミュニケーションが難しい」と思っている保護者は、保護者自身も園からよく思われていないかもと薄々気がついているものです。「自分はちゃんと子育てができていない」「園は自分にお説教したいはず」などと身構えて、園に対して関わりたくないと思っている傾

大豆生田先生が考える 保護者との関係づくり 4つのステップ

保護者との信頼関係が構築できていない段階で、「お子さんに朝ごはんをちゃんと食べさせてきてください！」などという、保護者は心を閉じてしまいます。保護者との関係づくりは、この4つのステップで考えるとよいでしょう。

- 1 園や保育者が安心できる場や人であると感じられる雰囲気を作る
- 2 先生に気軽に話せる、話しかけられてもいいという信頼関係を構築する
- 3 原則的には保護者自身から悩みをもちかけてもらう。それが無理ならば、「最近どうですか？」と話しかけてみる
- 4 保護者から話を聞き、どう解決するかを一緒に考え、具体的なアプローチを行う

コミュニケーションがうまくできていないと感じるときは、1、2のステップがきちんとできているかどうかを確認してみましょう。

向があります。

このような保護者に対しては、まず保護者が安心して園と話ができる雰囲気をつくっていただきたいと思います。コミュニケーションが難しいと感じる保護者にこそ、相手を身構えさせないよう、どうか明る

く、元気に、笑顔で声をかけてください。送迎時の声かけや、連絡帳でのコミュニケーションを通して、「応援していますよ」という保育者の思いをわかってもらうことが、保護者との関係の土台になるのです。

現場のみなさんへ

社会状況の変化から、今、園には多くのことが求められています。現場の保育者のみなさんのご苦労を想像すると、頭が下がる思いです。そんな中で保護者とのコミュニケーションを充実させていくのは、大変だと思われるかもしれません。しかし、家庭の存在を抜きにしてこれからの幼児教育は考えられません。幼児教育は、その成果がすぐには見えにくいものです。だからこそ、園で行われていることを「見える化」して、保護者の賛同と協力を得ていくことが大切だと思います。子どもの成長の様子をしっかりと伝えて、保護者とともに子どもを育てていく園であってほしいと思います。

園からの情報発信のねらい

◎園の考えや保育者の思いを伝える

一人ひとりの保護者とじっくり話をする機会は意外に少ないものです。園全体の理念や方針、園長や保育者の考えを伝えることも必要です。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→園だより、クラスだより

◎保育の様子をよりイメージしやすく伝える

保護者が最も関心を寄せているのは、クラスの中で日々子どもたちはどのように過ごしているかです。子どもたちの表情や、保育者の関わりなどが具体的にイメージできるような情報発信が求められます。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→園の掲示板、クラスだより、ホームページ、ブログ、写真掲示、ドキュメンテーション

◎保育を体験することで保護者が子どもを理解する

保育者の子どもへの関わりかたや遊びの中での学びを知ることは、保護者にとって自分の子育てを見直すきっかけにもなります。保育の現場を見て、保護者にも実際に保育に参加してもらうことも、情報発信のひとつです。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→保育参加、行事での保護者参加、サークル活動

◎双方向のやりとりで、保護者と信頼を深める

子育ての経験が乏しく、周囲に相談ができる人も少ない保護者の疑問や不安は、日々変わっていきます。送迎時に子どもの1日の様子を伝えるだけでなく、保護者が疑問や不安を気軽に打ち明けられるツールも必要です。

▶▶▶ 情報発信の手段の例→連絡帳、個人面談、保護者のお茶会

Q & A

保護者との関係づくり こんなときはどうする？

子どもと同様、保護者の個性もさまざまですから、中には関係づくりに苦慮することもあるものです。当研究所に寄せられた保護者に関する悩みの中でも特に多かったものについて、3名の先生がたにアドバイスをいただきました。

1 生活習慣ができていない

Q 早寝早起きの習慣がなく、朝食抜きの子供がいます。保護者には声をかけていますが、なかなか改善しません。どうしたら保護者としての自覚を持ってもらえるでしょうか。



A1 大豆生田先生
保護者の事情を理解して共感する気持ちを

「親がルーズだからだろう」と頭ごなしに否定せず、まずはそれぞれの家庭の事情の中で子育てを頑張っているという気持ちを持つことが大事だと思います。「いつも頑張っていますね」といった一言で、保護者は「もう少し頑張ってみよう」と思えるものです。
保護者は保護者なりに困り、努力していますから、相手の立場を思いやって共感することから始めてほしいと思います。そんなやりとりを続けるうちに、保護者は「なかなか早起きできなくて困っている」などと自分から悩みを打ち明けられるようになるかもしれませんし、保育者のアドバイスも素直に受け入れるようになっていくと思います。

A2 遠山先生
お願いするときは理由をいっしょに伝える

単に「朝ごはんは必ず食べさせてください」と言うのではなく、どうしてそれが子どもの育ちにとって重要なのかを理解してもらうことが先決だと思います。このケースでいえば、午前中はみんなで遊ぶ時間帯なのに、お腹が空いていれば元気が出なくてつまらない思いをしてしまいます。そのように根本にある考え方を理解してもらうことで、「忙しいけれど何とかしてみよう」という気持ちが自然と強まるのではないのでしょうか。
また保護者に「指導」するという気持ちを持たず、ともに子どもを育てる関係として協力をお願いするというスタンスが大切だと思います。

2 保護者自身が判断できない

Q 「子どもが園服を着てくれないのですが、どうしたらいいですか」など、細かい確認の連絡が多く、「自分で判断してほしい」と思ってしまう。こうした保護者にはどのように接したらよいでしょうか。



A1 大豆生田先生
保護者間の関係づくりが育児の不安を軽減

育児について相談できる人が周囲に少ない保護者は、不安になりやすいものです。育児書を開いても、我が子にぴったりと当てはまる答えが書かれているとは限りません。保育者としては、保護者の悩みを受け入れ、可能な範囲で答えればよいと思います。
ただ、1対1の関係の中で何でも質問される状況では、保育者に負担がかかってしまいます。その点、保護者同士の関係ができていれば、「そんなの大丈夫」「うちもそうだった」などと経験を語り合い、安心できるようになります。保護者同士で解決できることも多いのです。

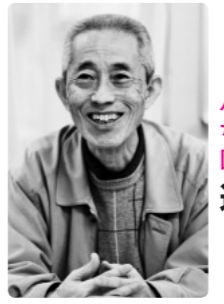
A2 鈴木先生
子育ての責任も自覚していただくことが大切

朝、保護者から子どもが38度の熱を出していると電話があり、お休みの連絡かと思ったら「休ませたほうがいでしょうか？」と聞かれて驚いたことがあります。このように保護者の判断に任せたいことを確認されるケースが増えている背景には、「誰かに判断してほしい」「私の声を聞いてほしい」といった保護者の依存心があると感じることがあります。例えば、「園服を着てくれない」という裏には、「子どもが言うことを聞かない」という心の叫びがあるのかもしれません。
単に分からないときは、細かいことでも保育者は答えたいほうがよいでしょうが、過度に保育者に頼ろうとしている場合は、「子育ての一番の責任は家庭」と伝えていく必要があると思います。

回答者



玉川大学教育学部
乳幼児発達学科
准教授
大豆生田啓友先生



パオパオ保育園
ちいさな家
園長
遠山洋一先生



花の井保育園
園長
鈴木美岐子先生

3 特定の保育方法に傾倒してしまう

Q テレビなどの影響か、保護者から特定の保育方法を求められることが少なくありません。中には、園の活動を「遊んでいるだけ」ととらえている保護者もいます。どうすれば園の保育について理解してもらえるでしょうか。



A1 大豆生田先生
遊びを通した学びの意味を地道に伝える

そういった保護者には、園の日常的な取り組みの意味がしっかり伝わっていないのかもしれませんが、だからこそ、テレビで紹介されるような刺激的な教育に飛びつきたくないのでしょ。背景には、子育てなどいろいろなことへの不安があるのかもしれませんが。
本来、幼児教育はゆっくりと成果が表れる地道なものです。園としては、遠回りに見えますが、自分たちが実践する教育・保育の意味を誠実に伝えることが大切です。園での遊びを通した学びは、すぐに成果が表れるものではありませんが、その後の人間的な成長の根っこを形成していくものであることを繰り返し発信していきましょう。

A2 鈴木先生
専門職として必要性を精査すればいい

私の園では保護者会などを通し、園の理念や経営方針などを伝えていきます。「しっかりとした考え方を持っているな」と感じてもらえれば、こうしたケースはあまり起こらないと思います。
それでも要望があったときは、否定せず、専門職の観点から子どもに必要なかどうかを精査します。そして必要と判断したら子どもの実態に合った形で導入を検討し、不必要ならば保護者に改めて園の理念や方針を伝えます。こうした要望を寄せてくださるのは、子どもの教育に関心をもっている証です。「言ってくださってありがとうございます」というスタンスで接すれば、保護者の気持ちを害することもないと思います。

4 保護者の心が不安定である

Q うつや育児ノイローゼなど、精神的に不安定な保護者への適切な対応について教えてください。



A1 遠山先生
先入観をもたず、まずはゆっくりと話を聞く

最近「〇〇症候群」などと、いろいろな症例の名前がありますが、まずはそのような先入観にとらわれずに、ゆっくりと話を聞くことが大事だと思います。その保護者の事情や悩みを理解しアドバイスすることで、状態が改善することもあるでしょう。
担任一人では対応が難しいと感じたら、一人で抱え込まず、ベテランの保育者などに相談してチームでかかわることが大切です。さらに、状況が園の力量を超える場合は、無理をせずに医療機関などの専門家と連携してチームで対応すべきだと思います。

A2 鈴木先生
「ここは安心してよい場所」というメッセージを

ストレス社会にもまれながら子育てをする保護者のつらさを受け止め、じっくりと話を聞いて、「ここは安心してよい場所ですよ」というメッセージを送ることが大切だと思います。そのようなかわりに安心感を抱いて落ち着きを取り戻す保護者は少なくありません。
しかし、そうした保護者への対応は時間も労力もかかります。保育者が一人で抱え込むと相当な負担になりますし、客観的に見られなくなるおそれもあります。職員間で情報を共有し、園全体でサポートしていく体制が不可欠といえるでしょう。